



## 子どもと共に成長していく

学校長 森下伊一郎

これまでの教員生活の中で、たくさんの色々な子どもたちと出会いました。今振り返ると、私が教師として成長できたのは、担任した子どもたちと保護者のお陰であると感謝の思いで一杯です。

25年前に小学校からA養護学校に転勤した2年目に、小2のN君を担当しました。N君は非常に重度で、体も弱く歩行も一人では難しい子でした。N君と出会って、まず動作法と感覚統合法を学びました。関節が固く筋力も弱く、座位や歩行・階段昇降に困難がある点と、原始反射が残り感覚等の発達未熟な点に重点的にアプローチしました。小1からの積み上げと毎日繰り返しの指導で、少しずつですが一人でゆっくり階段を昇り降りできるようになりました。この時N君の母親は、下校後毎日のように散歩に連れ出し、家の中では手足や体のマッサージと簡単な訓練を行っていたそうです。

その後H養護に転勤しました。そこで担任したのは非常にきつい自閉症の小5のT君です。体重が100kg近くあり、小学部の廊下・教室の壁やドアなどそこら中に彼の破壊の跡が残っていました。彼のパニック時の暴れ方は激しく、何人もの教員が怪我をし、めがねが割れ眼球が傷つき入院した先生もいました。言語理解力が結構あり認知の力もかなり高いのですが、感情の激しさと発語がないため意思を伝えられないジレンマと、自分の行動パターンに固執することで集団での活動が非常に難しい子どもでした。学校で守るべきルールを理解させ、自分の思いのみで動きたい気持ちをコントロールするため、彼との関係づくりとともにTEACCHの考え方を取り入れた指導を試みました。場所・時間・作業課題等の構造化です。学習場所や時間・スケジュールをわか

りやすくして、何をすればよいかを明確に提示する。そのため視覚的な手がかりを多く使い教室環境を整理していきました。彼独自の行動パターンや、したくない気持ちを抑えて学習のルールに乗せていくことは大変でした。最初は戦いとも言える状態でしたが、それに私が勝利して、一定の学習パターンができてからは少しずつ落ち着きが出てきて、指示もかなり通るようになってきました。

しかし、ある時近所のホームセンターで偶然出会い私の顔を見た瞬間、彼が突然怒りだし母親にあたり始めたので挨拶だけで私は帰宅しました。翌日母親から話を聞くと、校外で私に出会い『先生は学校にいないはずで、こんな所にはいないはずじゃない』と思ったようです。こんなエピソードも聞きました。この子に「車の中のカーテンを閉めて」と何度言っても反応しない。家では「カーテン閉めて」と頼むとちゃんを閉めてくれるのに。実は彼にとって、家のカーテンだけがカーテンであって、それ以外のものはカーテンと認識していないということでした。

このことなどから、私は自閉症の思考特性や言語理解・指示理解の困難さを少し分かることができました。それ以後、自閉症の特性や指導法を猛勉強して、できる限り適切な指導を心がけました。母親は自閉症について書物等で勉強した訳ではありませんでしたが、自分の子どもを本当に良く理解しているものだと感心しました。彼を6年まで担任し、母親からとても感謝されました。「この子を2年連続で担任してくれたのは先生が初めてです」と。

他にも多くの子どもと出会い、その度に新しいことを子どもや保護者から学びました。ねらいと指導方針をきちんと持ち、保護者と連携して粘り強く学習を重ねることが必ず子どもの成長に繋がります。